

スイス式標準ドイツ語非人称存在表現の諸相

-*es hat* と *es gibt* の対立をめぐって-

だいぎ ゆうた
大喜 祐太

京都大学大学院

daigi.yuta.82c@st.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

スイス式標準ドイツ語 (Schweizerhochdeutsch) には、ある実体が存在していることを述べる非人称の存在表現に、動詞 *haben* (E. have) を用いた「*es hat* 非人称存在表現」と動詞 *geben* (E. give) を用いた「*es gibt* 非人称存在表現」がある¹。本稿の目的は、その二つの表現の用法比較を通じて、スイス式標準ドイツ語における非人称存在表現の諸相を明らかにすることにある。

本稿では、第2節で、スイス式標準ドイツ語存在表現研究の意義を論じる。第3節では、Institute für Deutsche Sprache (IDS), Corpus Search, Management and Analysis System II (COSMAS II) および Schweizer Text Korpus (CHTK) の用例を抽出し、各存在表現の副詞的付加語・実主語の性質などについて検討する。つづく第4節では、スイス式標準ドイツ語における *es hat* と *es gibt* の使い分けを、アンケート調査を中心に考察する。第5節では、語用論的な観点から得た存在表現の分類を鑑みつつ、第3節および第4節の考察結果について議論し、スイス式標準ドイツ語と周辺言語（標準ドイツ語やフランス語）の用例を照らし合わせることによって、*es hat* と *es gibt* の特徴を模索する。

2. スイス式標準ドイツ語存在表現研究の意義

標準ドイツ語 (Hochdeutsch / Standarddeutsch) では、存在を言表するために、*sein* 動詞や他の存在動詞を使った表現だけでなく、*geben* を用いた非人称存在表現 *es gibt* + 対格名詞句 [acc.] (E. it gives acc.) が多用される。それに対して、ドイツ南部やスイスのドイツ語圏の地方では、*haben* を用いた表現 *es hat* + [acc.] (E. it has acc.) も広く散見される。たとえば、次のような用例である。

- (1) “Wo denn?”, fragte ich und sah mich um.
where then ask.3SG I and looked me around
“Beim Bahnhof hat es genügend Parkplätze”, sagte
near-the station have.3SG it enough parking-lots say.3SG-PST
der Polizist und wies mit der Hand in Richtung
the policeman and point.3SG-PST with the hand in direction

Bahnstation.

railway-station

(CHTK)

(1) の用例は、二人の話者が登場し、ある人物が警察官に駐車場の場所を尋ねた際に、「駅には十分な駐車スペースがある」という警察官の返答であり、ある事物の所在を示す表現である。

- (2) *Es hatnoch immer freie Plätze für das Eurodinner am 21.*
 it have.3SG still free places for the Eurodinner on the 21.
 09. *Wir haben die Registrierungsfrist nun bis zum 19.09 verlängert.*
 09. we have-1PL the registration-deadline now till-to-the19.09. extended

一方、(2) は、チューリヒ大学のあるサークルのメーリングリストを通じて「9月21日に行われるイベントにはまだチケットの余裕がある」ということを伝える表現である。

そもそも、こうした非人称存在表現である *es gibt* や *es hat* については、ドイツ語圏内でもその使用頻度に揺れが見られる。それぞれの用法に関する地域的な分布に関しては、Augsburg 大学の作成した言語地図 *Atlas zur deutschen Alltagssprache (AdA)* による資料があり、存在表現としての *es gibt / es hat / es ist*（ここでは複数形の *es sind*）がそれぞれの地域で許容されているのかを大まかに捉えることができる²。

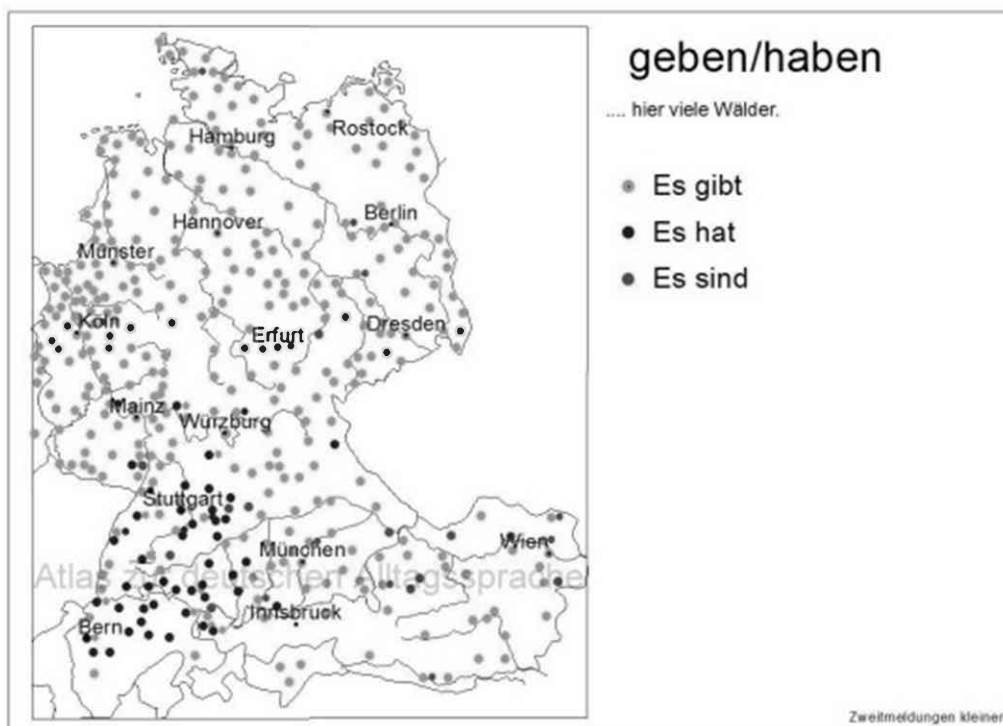


図1 *es gibt / es hat / es sind* の使用頻度に関する地域的分布

この図と資料から看取できるのは、以下の点である。(a) もっとも普及している形式は、*es gibt* であること、(b) *es hat* の使用は、シュヴァーベンやスイスドイツ方言の特性であり、他のドイツ語圏の人びとにとっては奇異に感じられるが、その地域での *es hat* の使用は一般的であること、(c) *es hat* は、ライン川中流やマイン川沿いの一部の地域では、*es gibt* の次によく用いられる形式であること、(d) ある同一地域で、*es gibt* / *es hat* / *es sind* がどのような語とともに用いられるかに応じて、異なった表現となる (cf. *hier hat es viele Hotels. vs. hier sind viele Wälder.*) ということ、つまり当該地域では *es hat* と *es gibt* の用例に微妙なニュアンスの相違が見られるということ、である。また、フランスと国境を接する地域で *es hat* の使用が多いことから、フランス語の存在表現 *il y a* との関連性を推察できるかもしれない³。

たしかに、この言語地図からは、ドイツ語圏内の地域での各非人称存在表現の分布を大まかに把握できる。とはいえ、それらの使い分けが実際にどのように行われているのかを断定することはできない。加えて特筆すべきことは、スイスのドイツ語圏での非人称存在表現 *es hat* と *es gibt* の使い分けに関しては、未だドイツ語学の中でも統一的な記述が与えられておらず、上記の言語地図やいくつかの辞書の中でも、そうした表現が方言の特殊事例としてしか扱われていないということである (Ammon *et al.* 2004)。Czinger (1997, 2002) では、アレマン方言、とりわけオーストリアのフォアアルルベルク方言での *es hat* (*es hot*) の使用について、主に統語論的な側面からの分析を試みているものの、異なる談話で出現する各表現の詳細な使い分けについては説明されていない。そのため、本稿では、*es hat* と *es gibt* の使い分けの解明に主眼を置きつつ、まずコーパス調査に基づいて二つの表現の差異を考察していく。

3. 事例研究 (1) コーパス調査

熊坂 (2010) によると、「ドイツ語圏のスイスの人びとによって、話し言葉として用いられるのが『スイスドイツ語 (Schweizerdeutsch)』であるのに対し、書き言葉として用いられるのは、スイスの標準変種である標準ドイツ語、すなわち『スイス式標準ドイツ語』である。本研究では、「スイス式標準ドイツ語」を考察対象に据える。なぜなら、この「スイス式標準ドイツ語」も語彙や文法などに関して、標準ドイツ語とは異なる特質を観察できるからである (Ammon *et al.* 2004, Bickel and Landolt 2012)。したがって、本節では、スイス式標準ドイツ語における、存在を表現する *es gibt* と *es hat* の間にある統語論的および意味論的特徴の差異を考察する。

3.1 用例分析

本節の目的は、*geben* (*es gibt* + acc.) と *haben* (*es hat* + acc.) を用いた非人称存在表現間の差異を観察することであり、スイスドイツ語およびスイス式標準ドイツ語コーパスCHTK内にある小説から各表現の用例を抽出した。それらの出現数は、次ページの表のようになっている⁴。

表 1 コーパスから抽出した用例の文献表

文献		現在形	過去形	合計
(A) Graf, Roger (1994)	<i>es gibt</i>	56	31	87
	<i>es hat</i>	12	3	15
(B) Honegger, Arthur (1988)	<i>es gibt</i>	14	2	16
	<i>es hat</i>	2	0	2
(C) Gloor, Kurt (1971)	<i>es gibt</i>	11	1	12
	<i>es hat</i>	9	0	9
	合計	104	37	141

これらのコーパスの各用例を、3.2 副詞的付加語の性質（特に場所的副詞句の有無など）と 3.3 実主語の性質（連体修飾節の有無、有生/無生の判断など）の二つの観点から吟味する。

3.2 存在表現内の副詞的付加語

まず、(A) の *es hat* の用例では、15 例中 15 例すべてで、実主語かつ副詞句を必要とし、その内の 14 例 (93%) が場所的副詞句である。たとえば、(3) は「ここの中に」(*hier drin*)、(4) は「その上に」(*da oben*)、(5) は「街に」(*in der Stadt*) という場所的副詞句をそれぞれ伴った表現である。

- (3) *Hier drin hat es kein Telefon.*
 here in-it have.3SG it no telephone
- (4) *Da oben hat es Leute, hinter denen die Mafia her ist.*
 there up have.3SG it people after whom the Mafia be.3SG
- (5) *Es hat in der Stadt noch mehr solche Spielclubs?*
 it have.3SG in the city much more such game-centers

他方、(A) の *es gibt* の用例では、87 例中 56 例 (64%) が実主語かつ副詞句を必要とし、場所的副詞句は 27 例 (31%) であった。場所的副詞句をとるのは (6) のような用例であり、(7) のように場所的副詞句以外の副詞句をとるものもあった。一方で、87 例中 31 例 (36%) が副詞句などを必要とせず、実主語のみをとる (8) のような用例であった。

- (6) *Es gibt noch andere von Wartburgs in dieser Stadt.*
 it give.3SG any other from Wartburgs in this city
- (7) *Es gibt durchaus Gemeinsamkeiten.*
 it give.3SG definitely common-features

- (8) *Er hat mir viel beigebracht, aber es gibt Dinge, die*
he have.3SG me.DAT many taught but it give.3SG things which
verstehe ich einfach nicht.
understand I just not

そのため、*es gibt* は必要とすべき項に実主語のみをとるような一項動詞としても機能し、他方、*es hat* は基本的に副詞句が必要である、と推測できる。他には (9) から (11) のような例がある。(9) は場所的副詞句以外の副詞句、「さらにもっと」(*immer mehr*) をとる用例である。それに対して、(10) は「庭園の休憩所で」(*in der Laube*)、(11) は「そこ」(*da*) という場所的副詞句と共起している。

- (9) *Glaubst du eigentlich, daß das noch schlimmer kommt mit der*
believe.2SG you actually that the much worse come.3SG with the
Wirtschaft? Ich meine, ich habe gehört, daß es immer mehr
economy I mean.1SG I have.3SG heard that it still more
Arbeitslose gibt.
unemployed give.3SG
- (10) *Unerträglich diese Hitze. In der Laube hat es fast vierzig Grad.*
unbearable this heat in the porch have.3SG it almost forty degree
- (11) *Es hat ziemlich viel Verkehr da, und es wird einfach zu*
it have.3SG quite many traffic there and it become.3SG just too
schnell gefahren in einem solchen Quartier.
fast driven in a such area

副詞句についての *es gibt* と *es hat* の使い分けとして特徴的なのは、(a) 場所的副詞句に関して、*es gibt* では比較的大きな空間 (*ex. Holland, Schweiz, dieser Welt, etc.*) をとり、*es hat* では、身近な空間 (*ex. hier, da, etc.*) をとること、(b) 時間的副詞句に関しては、*es gibt* では、ある一定の長さのある期間 (*aus dieser Zeit, immer, seit Jahren, etc.*) の副詞句をとって、その期間の「状態」を表現すること、である。他方、*es hat* は、あまり時間的副詞句をとらず、実主語にとっての一時的な「出来事」を強調しているように見える。

3.3 存在表現内の実主語

先に議論した、副詞的付加語の有無は、*es gibt* および *es hat* の統語的特徴を浮かび上がらせてはいるものの、その用法を見分ける上で十分であるとはいえない。すなわち、ある実体が存在している場所・空間だけでなく、存在している実体そのものの性質についても考慮する必要があるということである。したがって、本節では、存在表現内に出現する実主語について、連体修飾節の有無と有生性の観点から考察する。

3.3.1 実主語への連体修飾節の有無

実主語に関しては、まず連体修飾節、すなわち関係詞を用いて実主語を修飾する節、実主語の同格的付加語として機能する *dass* (E. *that*) 節、実主語を修飾する *zu* (E. *to*) 不定詞などを見ていく。*es hat* については、(A) の 15 例中 4 例 (27%) が連体修飾節と共起していた。

- (12) *Da oben hat es Leute, hinter denen die Mafia her ist.*
 there up have.3SG it people after whom the Mafia be.3SG

他方、*es gibt* では、87 例中 42 例 (48%) が連体修飾節と、その内の 15 例が副詞句なしの用例との共起であった。

- (13) *Er hat mir viel beigebracht, aber es gibt Dinge, die*
 he have.3SG me.DAT many taught but it give.3SG things which
verstehe ich einfach nicht.
 understand I just not

連体修飾節を用いた存在表現は、談話の中にある実体をいったん導入し、それについて詳細な説明を加えるという効果を与えることができる。本調査では、*es gibt* の方が連体修飾節と共起する傾向が強いことが分かるが、*es gibt* ではある実体の存在のありかを示すことよりも談話へのある実体の導入に主眼がある使用が好まれると推測できる。

3.3.2 実主語の有生性

さらに、実主語の有生性については、*es gibt* および *es hat* とともに実主語に有生物も無生物もとる。たとえば、以下のような用例である。

- (14) *Glaubst du eigentlich, daß das noch schlimmer kommt mit der*
 believe.2SG you actually that the much worse come.3SG with the
Wirtschaft? Ich meine, ich habe gehört, daß es immer mehr
 economy I mean.1SG I have.3SG heard that it still more
Arbeitslose gibt.
 unemployed give.3SG
- (15) *Da gibt es ein Dutzend oder mehr Leute, die in Frage*
 there give.3SG it a dozen or more people who in question
kämen.
 come.3PL-SBJV

- (16) *Es gibt hier im Dorf nicht sehr viele Läden und Souvenirshops.*
 it give.3SG here in-the village not so many stores and Souvenir-shops

(14) Arbeitslose「失業者」や (15) Leute「人びと」は有生物とみなせる。他方、(16) の *viele Läden und Souvenirshops*「多くの商店や土産物店」は無生物である。

以下の表では、*es hat* と *es gibt* の実主語を有生物・無生物に分類している。

表 2 有生性に基づく *es hat* 存在表現内の実主語の分類

<i>es hat</i> + [acc. (= 実主語)]		
	有生物	無生物
A	drei Personen, jede Menge, Leute ×2, Verrückte, Verfolgte, viele nette Mädchen, [7]	einen schönen Teich, kein Telefon, einen Briefumschlag, vierzig Grad, Spielclubs, einen Kleber, zwei Eingänge, Eis [8]
B	[0]	genügend Parkplätze, keinen Zweck [2]
C	wenig Buben, eine gewisse Schicht von älteren Leute [2]	das Gefühl, ein Tischchen, gute Sachen, viel, nichts, sein Kinderzimmer, viel Verkehr [7]

表 3 有生性に基づく *es gibt* 存在表現内の実主語の分類

<i>es gibt</i> + [acc. (= 実主語)]		
	有生物	無生物
A	viele Frauen, Frauen ×2, intelligente Menschen, ihren Mann, Männern, Wissenschaftler, viele Mütter, Arbeitslose, ein Duzend oder mehr Leute, erpreßbare Leute, eine ganze Menge ×2, Männer, Menschen ×2, Leute ×2, eine Menge Schwachsinn, eine Menge Fachleute, einen notorischen Verbrecher, andere von Wartburgs, angeblich Schwarzdrosseln, einen Lothar (Vorname), eine Frau, keinen Carlo	ein Buch, Spekulationen, nichts Konkretes, etwas zu lachen, andere Spiele, nichts Schlimmeres als ganz normale Forscher, etwas Lohnenderes, neurotische Wesen, nichts ×2, einen Steifen, nicht viel zu kürzen, Leichen, etwas Neues, kein Material für ihn, Typen, einen Computertrick, eine andere Möglichkeit, Dinge, kein Lammfleisch, Hinweise, keine Anhaltspunkte, Gemeinsamkeiten, zwielichtige Gestalten, Momente, viele Läden und Souvenirshop, eine Menge Möglichkeiten, ausgezeichnete Software, eine Unterschied, eine Hinweis, nichts mehr zu verrühren, keinen Aufstand, Anhaltspunkte, kunstvoll angelegte Brunnen, Gründe, die Gruppe, mehrere Salons, welche..., eine Sendung über herausragende Köpfe der Wissenschaft, nirgends Zimmer oder Wohnungen, einen Ausgang, Tausende solcher Kindheiten, nichts zu

	Bauer (Vor-Nachname), niemanden [27]	ordnen, keinen Zweifel, eine kleine Erbschaft, ein beruhigendes Polster, Krach, etwas, einen Hinterausgang, Geräusche, Problem, keine Zeigen, ein einziges Photo, eine ganze Menge von Projekten, nichts Auffälliges [55]
B	Leute [1]	etwas zu erzählen, ein Mittel, nichts zu..., Lücken, schwarze Schafe, weiße Schafe, graue Schafe, einige dunkle Punkte, verschiedene Schlüsse, eine Querverbindung, Helikopter, zu vieles, viele Zimmer, nichts klares zu erkennen, kein Entrinnen [15]
C	[0]	2 Betten, einen Tisch, einen Schrank, eine Kommode, ein Gestell, alles, nette Spielplätze, Wiese, nichts, eine Geschwindigkeitsbeschränkung, keine andere Gefahr, keine Reklamationen, Kinderschutzverbände, eine Jugendkommission, viele Dinge, nichts, Tage [17]

表 4 有生性に関する *es gibt* と *es hat* の対立

	<i>es gibt</i> + [acc.]		<i>es hat</i> + [acc.]	
	有生物	無生物	有生物	無生物
合計	28	87	9	17

量的な調査として考察する限りでは、*es gibt* と *es hat* との間には実主語の有生性に有意な差異はあまり見られない。しかしながら、もう少し質的に見てみると、*es gibt* では、実体のないような事物 (ex. nicht Konkretes, Momente, etwas Neues, etc.) を多くとる傾向にあることが分かる。ただし、*es hat* では、実主語に「温度」などをとる用例も見受けられ、こうした語は、*es gibt* とはまったく共起できない。

このように、スイス式標準ドイツ語のインフォーマントが *es gibt* と *es hat* を実際にどのように用いているかについては本調査のみでは統語論的ないし意味論的な分析に制限され、詳細な使い分けを論じることが困難である。そのため、次節では、アンケート調査を通じて二つの用法を比較していく。

4. 事例研究 (2) アンケート調査

アンケート調査は、2013 年 2-3 月、チューリヒにてスイスドイツ語母語話者に対して、スイス式標準ドイツ語の存在表現 (*es hat* vs. *es gibt*) を考察する目的で行われた。各地方間の差異があるのかを調べるため、1. 出生地 (州) 2. 居住地 3. 生年月日 4. 母語 5. 話せる言語 6. 職業などの個人情報も項目として含み、チューリヒ大学の授業などで許可を得て行った。回答に不足のあるものを除き、最終的に今回採用した回答は 39 人分である⁵。

4.1 アンケート項目の分類：標準ドイツ語非人称存在表現の特徴

アンケートの内容は、語用論的分类：「実在文」「所在文」「眼前描写的存在文」「新情報導入的存在表現」と語彙的差異：「未来を表す語彙との共起」「否定詞を伴う表現」を判断材料としている。なぜなら、とりわけ存在表現の語用論的な機能が *es hat* と *es gibt* の使い分けに影響を与えていると想定したからである。大喜 (2013) では、東郷 (2012)、金水 (2006)、Dik (1980) を踏まえ、標準ドイツ語のあらゆる存在表現を、「時空間的存在表現」と「新情報導入的存在表現」に分類している。時空間的存在表現の機能は、存在前提の共有と存在様態の説明であって、それらは指示 (reference) と述定 (predication) を備えた表現である。他方、新情報導入的存在表現の機能は、存在前提の導入のみであり、指示を欠くことによって述定もない表現である。その際、Diessel (1999), Hartmann (1982), Haspelmath (1997), Lyons (1999) を吟味し、ドイツ語存在表現の特徴を実主語と副詞句の指示性の観点から考察している。それらは以下のように要約できる。

表5 ドイツ語存在表現の特徴 (大喜 2013: 37-46)

存在表現		形式的特徴	語用論的特徴
時空間的存在表現 「指示」と 「述定」	実在文	・場所的副詞句を持たない (wirklich などの世界指定語を伴う場合がある)	・実主語の指示性が高い (とくに固有名など) ・existieren と書き換え可能
	所在文	・場所的副詞句をかならず伴う	・場所的副詞句の指示性が高い ・動詞の多様性 (sein 動詞, liegen, stehen, etc.)
	眼前描写的存在文	・特に hier や da といった副詞句を伴う	・es gibt ではきわめて容認度が低い ・外部照応的な指示を持つ実主語 (直示的な使用) ・直示性を持つ実主語 → ジェスチャーなどとの共起
非時空間的存在表現 「新情報 (存在前提) の導入」	新情報導入的存在表現	・表現自体が文法的な指示を持たない	・ある談話に新情報を導入 ・先行する談話と断絶している
	部分集合表現	・数量詞 (viele, einige, zwei, drei, etc.) を伴う ・母集合の指定 (もしくは含意) がある	・ある集合内の要素の有無多少

本アンケート調査では、この標準ドイツ語非人称存在表現の分類を念頭に置き、四段階評定を採用した。*es hat* と *es gibt* それぞれに1から4のポイント (1:「適当でない」2:「部分的に適当である」3:「大部分適当である」4:「十分に適当である」) を設定し、さらに両

方の表現がともに適当でない場合は別の表現での言い換えを依頼した。アンケート用紙は、見開き 1 ページ・計 20 項目の形式である。

4.2 アンケート調査の用例と結果

アンケートで使った用例と結果を以下の表と図に示している⁶。表の左側の番号は、アンケート項目の番号を表す。

4.2.1 実在文

表 6 について、2 の項目は、物語の中の John MacClane という登場人物が現実にも存在するということを表現している。8 は、「ネッシー」(Nessie) が存在しているのかどうか、10 では「(実際に) 存在する中で最も美しい場所」というように、これらの用例はすべて実在文とみなせる。

表 6 用例：実在文

2	Die unglaubliche Geschichte, die hier erzählt wird, ist tatsächlich so passiert. John McClane <u>gibt</u> es wirklich. (HMP) “The unbelievable story, which is told here, really happend. John McClane, the eponymous, really is”
8	<u>Gibt</u> es Nessie oder nicht? (Die Welt, 4 Juni 2007) “Is there Nessie or not?”
10b	Da drüben, da hat es einen schönen Teich, das ist der schönste Ort, den es <u>gibt</u> . (CHTK) “Over there, there is a beautiful pond, that is the most beautiful place that there is”

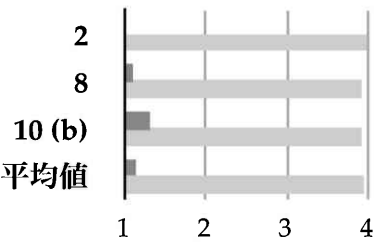


図 2 結果：実在文の容認度

これらの表現中での *es hat* と *es gibt* との使い分けは、上記の図のようになり、上段の濃いグラフが *es hat* の容認度の平均値を、下段の淡いグラフが *es gibt* の容認度の平均値を示している（以下の容認度の図も同様）。図から読み取れるように、実在解釈では、*es hat*

は母語話者に許容されず（平均値 1.14 ポイント）、*es gibt* はほとんどの母語話者に許容される（平均値 3.95 ポイント）。

4.2.2 所在文

これらの表現は、ある空間に何らかの事物が存在するという所在文である。1 は「ここに電話がない」ということ、6 は「Rigi という山（の頂上）には雪がかかっている」ということ、11 は「チケット売り場にはチケットが十分に残っている」ということを表現している。

表7 用例：所在文

1	Hier drin <u>hat</u> es kein Telefon. (CHTK) “There is no telephone inside here”
6	Auf dem Rigi <u>hat</u> es Schnee. (CHTK) “On the Rigi (mountain) there is snow”
11	Etwa 8000 Billets sind bis jetzt verkauft worden; es <u>gibt</u> also noch genügend Billets an den Tageskassen. (HAZ) “about 8000 tickets were already sold; there are still enough tickets at the box office”

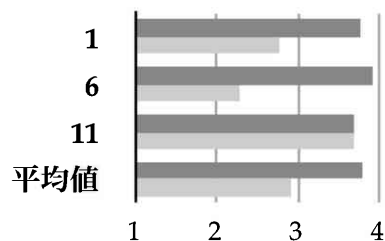


図3 結果：所在文の容認度

図のように、11 は *es hat* も *es gibt* も両方とれるが、所在解釈の平均値では、*es hat* が優勢である (3.79 vs. 2.91)。

4.2.3 眼前描写的所在文

表8 の表現は、眼前描写的に実主語について述べる所在文であり、多くが身体的なジェスチャーなどを伴う表現である。12 は話し手と聞き手の眼前に「食堂がある」ということを示し、16 は眼前の「山と谷」、10a は「美しい池」についての表現である。

表 8 用例：眼前描写の所在文

12	Siehst du? Dort <u>hat</u> es eine Mensa. “Do you see? There is a cafeteria there”
16	Dort <u>sind</u> es die Berge, hier die Täler. (HAZ) “There are the mountains there, the valleys here”
10a	Da drüben, da <u>hat</u> es einen schönen Teich, das ist der schönste Ort, den es gibt. (CHTK) “Over there, there is a beautiful pond, that is the beautiful place which there is”

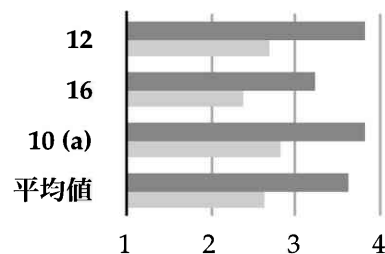


図 4 結果：眼前描写の所在文の容認度

こうした眼前描写の所在文については、所在文同様に *es hat* の容認度が *es gibt* を上回っている (3.62 vs. 2.63)。

4.2.4 新情報導入的存在表現

表 9 の用例は、新情報導入的存在表現である。4 は「牛乳や乳製品にアレルギーを持つ人びと」、18 は「『单子論』というタイトルの本」、13 は「農業における構造変化」を談話に導入するような表現である。

表 9 用例：新情報導入的存在表現

4	Es <u>gibt</u> Menschen, die z.B. gegen Milch und Milchprodukte allergisch reagieren. (HBK) “There are people who have an allergic reaction to milk and milk products etc.”
18	Es <u>gibt</u> ein Buch von ihm mit dem Titel <i>Monadologie</i> . “There is a book by him with the title <i>Monadologie</i> ”
13	Seit Jahren ist klar: Es <u>gibt</u> einen Strukturwandel in der Landwirtschaft. (BRZ) “It is clear since years: there is a structural change in the agriculture”

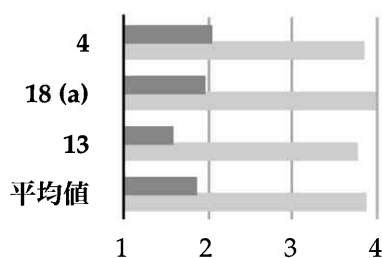


図 5 結果：新情報導入的存在表現の容認度

このようなある新しい情報を談話に導入するような表現では、*es gibt* が好まれ、ほとんどの母語話者に許容されている。一方、*es hat* の容認度は半分（2.5 ポイント）以下の 1.87 ポイントにとどまる。とはいえ、本稿の例文 (2) のように、かならずしも新情報導入的存在表現と *es hat* が共起しないわけではない。

4.2.5 未来的語彙

表 10 では、3 は「明日」(Morgen)、5 は「今晚」(heute Abend)、15 は「もうすぐ」(bald) などのような未来的語彙を備えた存在表現である。

表 10 用例：未来的語彙と共起する用例

3	Morgen gibt es Schnee. “There will be snow tomorrow”
5	Was gibt es heute Abend im Fernsehen? “What is there on TV tonight?”
15	Es ist dunkel draussen. Es gibt bald Regen. “It is dark outside. It will rain soon”

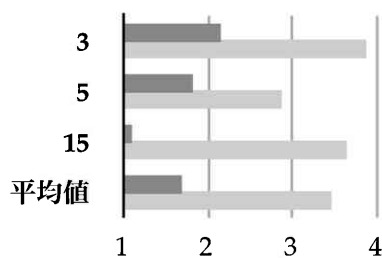


図 6 結果：未来的語彙と共起する表現の容認度

これらの表現では、*es gibt* が優勢であり、*es hat* はほとんど容認されなかった（1.69 ポイント）。しかし、5 の表現では、*laufen* (E. be on) や *kommen* (E. come)、15 では *werden* (E. will) などの別の動詞や助動詞で代用する母語話者が多かった。

4.2.6 否定詞

表 11 は、否定詞と共起する用例である。7 は「悲観的になる理由はない」ということ、9 は「これ以上言い訳はない」ということ、14 は「何もいうことはない」ということを表現している。

表 11 用例：否定詞と共起する用例

7	Es <u>gibt</u> keinen Grund, pessimistisch zu sein. (BRZ) “There is no reason to be pessimistic”
9	Es <u>gibt</u> keine Ausreden mehr. (HAZ) “There is no more excuse”
14	Auf Wiedersehen. Es <u>gibt</u> nichts zu sagen. (HAZ) “See you again. There is nothing to say”

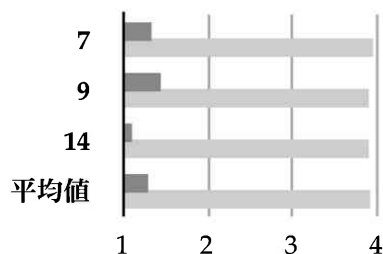


図 7 結果：否定詞と共起する表現の容認度

今回のアンケートでは、否定詞を伴う表現で *es hat* の容認度は全体的に極めて低かった (*es hat* 1.29 vs. *es gibt* 3.92)。しかし、否定詞を伴う所在文の場合（項目 1）では許容されているため、これらの表現では否定詞以外の要因が関わっている可能性も十分にある。

4.2.7 その他

次ページでは、その他の用例をまとめておく。

表12 用例：その他

6	Auf dem Rigi <u>hat</u> es Schnee. (CHTK) “On the Rigi (mountain) there is snow”
17	Unerträglich diese Hitze. In der Laube <u>hat</u> es fast vierzig Grad. (CHTK) “Unbearable, this heat. In the porch, it is almost forty degrees”

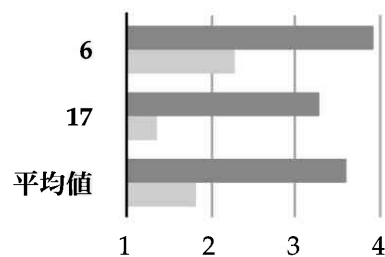


図8 結果：その他の表現の容認度

17のような「温度」を実主語にとる表現は、標準ドイツ語では *sein* 動詞を用い、*haben* や *geben* を用いた場合には非文となる。しかしながら、スイス式標準ドイツ語では、*es hat* を違和感なく使用する母語話者が多い (3.28 ポイント)。

4.3 アンケート調査のまとめ

アンケート調査によれば、実在文解釈できる場合、スイス式標準ドイツ語では *es hat* を用いると非文となる。(17) の「ネッシーは存在するのか、それとも存在しないのか」では、「ネッシー」のような仮想的存在の現実性が問題となっている。

- (17) *Gibt/*Hat es Nessie oder nicht?* (アンケート項目 8)
give/have.3SG it Nessie or not

さらに、未来的語彙と共起する用例の考察、以下の用例 (18) と (19) の比較から、*es hat* は「既存の状態」を、*es gibt* は「これからの未来」の意味を表現する傾向にあるということが分かる。

- (18) *Morgen gibt/*hat es Schnee.* (アンケート項目 3)
tomorrow give/have.3SG it snow
- (19) *Auf dem Rigi hat/?gibt es Schnee.* (アンケート項目 6)
on the Rigi have/give.3SG it snow

また、今回の調査では、*es hat* と *es gibt* の対立について、地域分類間の差異はほぼ見られなかった。Czinger (1997, 2002) でも指摘されているように、スイスドイツ語が含まれる南アレマン方言 (Südalemannisch) の上位区分であるアレマン方言に属する別の方言 (ex. Niederalemannisch, Schwäbisch) でも *es hat* (*es hot*) を使用しているため、*es hat* と *es gibt* の対立は、おそらくアレマン方言全体での現象といえるであろう。

5. 事例研究および周辺言語との比較

5.1 スイス式標準ドイツ語非人称存在表現の特徴

ここでもう一度、第二節でのコーパス調査および第三節でのアンケートの調査結果を以下のようにまとめておく。

コーパス調査から、非人称存在表現の副詞的付加語について、(a) *es hat* には、基本的に場所的副詞句が必要であること、(b) *es gibt* は、場所的副詞句に比較的「大きな空間」をとるのに対して、*es hat* は、「身近な空間」をとること、さらに (c) *es hat* はあまり時間的副詞句をとらないということが明らかになった。実主語については、(a) *es gibt* も *es hat* も実主語に有生物・無生物をとること、(b) *es gibt* も *es hat* も実主語に数量詞をとること、(c) *es gibt* の方が実主語に実体のない事物 (ex. nicht Konkretes, Momente, etwas Neues, etwas zu..., nicht... zu..., etc.) をとることが挙げられる。

アンケート調査から、(a) 実在解釈では、*es hat* は許容できないこと、(b) 所在解釈では、*es gibt* より *es hat* の方が優勢であること、(c) 新情報導入的解釈では、*es gibt* はほぼ許容されるが、*es hat* の容認度は半分以下であること、(d) *es hat* は、未来表現とほぼ共起しないということ、(e) 眼前描写的所在文では、*es gibt* が容認されないわけではないが、所在文同様に *es hat* が好まれること、さらに、(f) コーパスでも出現したように、*es hat* は「気温」についての表現にも使用されるということが分かった。特に (e) について、以下の (20) はコーパスから抽出した用例であるが、(A) 発話者の近くにあり直示的に示すことができる「美しい池」は *es hat* で、(B) 発話者にとって空想の対象となるような、実在解釈できる「存在する中で最も美しい場所」は *es gibt* でそれぞれ表現されていた。

- (20) *Da drüben, da (A)hat/?gibt es einen schönen Teich, das ist*
 over there there have/give.3SG it a beautiful pond.ACC that be.3SG
*der schönste Ort, den es (B)gibt/*hat.* (アンケート項目 10)
 the most-beautiful place the.ACC it give/have.3SG (CHTK)

標準ドイツ語に関する分類がスイス式標準ドイツ語存在表現にも妥当するのかどうかを検討した場合、以下のような特徴が浮かび上がる。すなわち、標準ドイツ語との共通点として、(a) スイス式標準ドイツ語の存在表現についても指示性に鑑みた議論は有効であるということ、(b) *es hat* の実在解釈は許容できず *es gibt* が好まれるということである。それに対して、相違点として、(a) 所在文に関しては、スイス式標準ドイツ語では、非人称

存在表現である *es hat* が多用されること、とりわけ重要なのが、(b) 実主語の眼前描写的使用を許容するということである。たとえば、(1) のような用例である。特に後者の相違点に関して、標準ドイツ語では、所在文では *es gibt* をほとんど使用せず、眼前描写的に使用できる *es gibt* は皆無である。それゆえ、標準ドイツ語では、所在文に *es gibt* 以外の存在動詞 (ex. *sein, liegen, stehen, etc.*) が代用されるが、スイス式標準ドイツ語使用者は、そうした所在文の領域を *es hat* で言い換えていると推測できる。

5.2 周辺言語との相違からの考察

こうしたスイス式標準ドイツ語にある *es hat* と *es gibt* との対立には、周辺言語からの影響も考えられる。たとえば、フランス語の *il y a* 存在表現との構造的な類似性が挙げられる。しかも、前項で論じた眼前の事物を描写するような用例に対して、フランス語では存在表現 *il y a* を使用でき (東郷 2009)、両表現の機能的な共通点も見出すことができる。

加えて、スイスでは、ドイツと比較して、「国語浄化」(Sprachpurismus)⁷ が穏健であったため、すなわち国政として積極的に外来語を母国語に置き換えることをしてこなかったもので、特にフランス語からの語彙が未だ多く残っている。さらに、語彙だけでなく、統語的な観点から見ても、スイス式標準ドイツ語と標準ドイツ語間には揺れがある。文法書の中でも、*sein* や *haben* の使用に関して、いくつかの場合で、スイス式標準ドイツ語と標準ドイツ語との間に相違があることが指摘されている。たとえば、以下の例である。

(21) Swiss High German

a. *Ich habe kalt.*

I have.1SG cold

High German

b. *Mir ist kalt.*

me.DAT be.3SG cold

French

c. *J'ai froid.*

I-have.1SG cold

(21a-c) の表現はすべて、「わたしは寒い (寒さを感じている)」ということを表現している。標準ドイツ語では、通例 (21b) のように *sein* 動詞を使用するのに対し、スイス式標準ドイツ語 (21a) では *haben* を使用しており、フランス語の用例 (21c) と共通の統語的な構造を持つ。コーパス内にも、以下の (22) のように頻繁に出現する。

(22) *Wenn ich nicht unter die Decke kriechen darf, habe ich zu kalt.*

when I not under the covers slip may.3SG have.1SG I too cold

(CHTK)

もちろん、周辺言語からのスイス式標準ドイツ語への影響について議論するためには、*es hat* と *es gibt* の構造や用法の共時的な分析だけでなく、これらの表現の成立を通時的に考察する必要があるが、この点に関する歴史的探究については今後の課題としたい。

6. おわりに

最後に、二つの非人称存在表現が持つ特徴を列挙しておく。*es hat* の特徴は、「現在志向」「現実」「一時的な出来事」などであり、それに対して、*es gibt* では、「未来志向」「現実・非現実」「状態」「一定の幅のある時間」などである。さらに詳しくいえば、存在物が実際に存在する、もしくは隣接している場合には、*es hat* が好まれ、「否定」「未来」「仮想 / 現実の比較」などの場合には、*es gibt* が好まれるということである⁸。こうした傾向をいっそう明確に分類するためには、「所在性」「実在性」「時間性」「静的 / 動的の区別」などの要素特性を精査しなければならない。たとえば、以下の用例のように、複数の要素特性が同時に出現する場合である。

- (23) *“Die Wetterprognosen für morgen sind gut. Es hat 59 Zentimeter
the weather-reports for tomorrow be.3PL good it have.3SG 59 centimeter
Neuschnee. Wenn es morgen früh nicht zu viel Wind hat,
new-snow if it tomorrow morning not so many wind have.3SG
werden wir jeweils drei Ladungen auf einmal loslassen”, verkündet
will.1PL we at-the-time three loads at once let-go announce.3SG
der 48-Jährige mit routinierter Stimme.
the 48-years with experienced voice* (ZHT)

上記の (23) では、第二文と第三文の二つの存在表現に *es hat* が使用されている。現在の状態を記述する「59 センチメートルに降り積もった新雪」(第二文) を実主語にとるのは上述した存在表現の特徴と矛盾しない。しかし、直後の表現で「明朝あまり風がない (吹かない) ならば」(第三文) という未来の語彙 (*morgen früh*) と *es hat* の共起も見られる。とはいえ、この *es hat* は条件節内での出現であり未来表現とは呼べず、しかも、明朝の「一時的な出来事」として把握できる。この用例では、「未来」「一時的な出来事」「条件節」などの各特性が重畳しているため、いっそう精緻な定式化による分類とともに、単純な語彙的分析だけでなく、ある一定のコンテキストを含めた用法比較が必要である。

また興味深いことに、アンケートのコメントから明らかになったことは、母語話者がこうした *es hat* と *es gibt* の対立をほとんど意識せず日常的に使い分けているという事実である。つまり、それらの表現が「存在」というきわめて基本的なものを扱うがゆえに、母語話者にとっても *es gibt* と *es hat* との使用区分は、非常に曖昧なのである。したがって、こうした日常的な言語使用を研究する分野では、非母語話者的観点からの考察がドイツ語学・方言学に対する貢献へとつながるであろう。

注

1. 今回のコーパス調査では、スイス式標準ドイツ語 (Schweizerhochdeutsch) の用例を主に考察する。スイスドイツ語 (Schweizerdeutsch) のチューリヒ方言では、本来、haben と geben の不定詞はそれぞれ ha と gä であり、es hat は es hät、es gibt は es git となる。
2. Universität Augsburg, Atlas zur Deutschen Alltagssprache (AdA). <http://www.atlas-alltagssprache.de/runde-3/f04c/> (現在は、Universität Salzburg に本拠地を移している。)
3. フランス語存在表現 *il y a* は、日本語では「持つ」に該当するフランス語動詞 avoir を用いた表現である。この avoir (Lat. habere) は、ゲルマン語の geben と根源的には同根である (IE. ghabh-, ghebh-)。それに対し、ドイツ語 haben や英語 have (IE. kap-) は、本来「捕らえる」の意味を持ち (Lat. capere)、フランス語の avoir とは語源的な関係がない Pfeifer (1997: 335, 380)。そのため、*il y a* と *es hat* との歴史的な関連性については、言語接触の可能性なども含めて慎重に検討する必要がある。
4. スイス式標準ドイツ語の用例は、コーパスの中の Graf, Roger. (1994): *Ticket für die Ewigkeit*. Honegger, Arthur. (1988): *Dobermänner reizt man nicht*. Gloor, Kurt. (1971): *Die grünen Kinder*. から抽出した。
5. アンケートの作成には、Grünert *et al.* (2008) を参考にした。母語話者の観点から Benjamin Hensel, Anja Collazo 両氏からのご協力と、またアンケート項目については、坂口友弥氏をはじめ京都大学大学院人間・環境学研究科言語比較論講座の方々から多くのご助言を頂いた。
6. IDS Mannheim, COSMAS II 内の用例については、以下のように各情報媒体を略記する。Braunschweiger Zeitung (BRZ), Hannoversche Allgemeine (HAZ), Handbuchkorpus (HBK), Hamburger Morgenpost (HMP), Zürcher Tagesanzeiger (ZHT)。
7. Bickel and Landolt (2012: 83-84) によれば「ドイツでは、国家的な国語育成によって、フランス語からの借用語や外来語の多くは、十九世紀から二十世紀の間にドイツ語化された。スイスでは、こうした『国語浄化』(Sprachpurismus) は、穏健的に行われた。今日スイス式標準ドイツ語で用いられているフランス語起源の語は、初期にはドイツでも使用されていたが、今では時代遅れになっているか、廃れてしまっている。スイスは四言語併用のため、フランス語からの借用語も今なお存在しており、特別にスイスで用いられるものとなっている」といわれている。特に、動詞だけ列举してみても以下のようなものがある。ex. affichieren (Hg. ankleben; E. stick), couvertieren (Hg. in einem Briefumschlag stecken; E. put in an envelope), fichieren (Hg. über jmdn. Informationen sammeln und speichern; E. gather and save information about someone), flattieren (Hg. schmeicheln; E. flatter), sich foutieren (Hg. sich nicht kümmern: not take care of something), kumulieren (Hg. sammeln, akkumulieren; E. cumulate), legiferieren (Hg. Gesetze erlassen; E. promulgate laws), panaschieren (Hg. Kandidatennamen verschiedener Parteien auf einem Wahlzettel mischen; E. vote for different candidates

in a same ballot paper), portieren (Hg. für eine Wahl vorschlagen und unterstützen; E. nominate), pressieren (Hg. dringend sein; E. be urgent), redimensionieren (Hg. in der Grösse einschränken, kleiner machen; E. make small), rekurrieren (Hg. Berufung einlegen, auf etw. zurückgehen; E. refer back to something).

8. *es hat* と *es gibt* の特徴について、存在の「現実性」「仮想性」に関する議論は、京都大学大学院人間・環境学研究科／日本学術振興会特別研究員の木本幸憲氏のご助言に多くを負っている。

略号一覧

ACC	accusative
DAT	dative
E.	English
Hg.	High German
IE.	Indo-European languages
Lat.	Latin
PST	past
PL	plural
SG	singular
SBJV	subjunctive
1	1st person
2	2nd person
3	3rd person

参考文献

- Czinger, Christine. 1997. Bemerkungen zur Existenzbehauptung und Ortsbestimmung im Deutschen und einer Alemannischen Varianten. *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 41: 39-60.
- Czinger, Christine. 2002. Decomposing Existence: Evidence from Germanic. In Werner Abraham and Jan-Wouter Zwart (eds.), *Issues in Formal German(ic) Typology*, 85-126. Amsterdam: Benjamins.
- 大喜祐太. 2013. 「ドイツ語における存在表現の語用論的分析」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Dik, Simon C. 1980. *Studies in Functional Grammar*. London: Academic Press.
- Glaser, Elvira, and Bart Gabriela. 2012. Discovering and Mapping Syntactic Areas: Old and New Methods. In Álvarez Pérez, Xosé Afonso/Carrilho, Ernestina/Magro,

- Catarina (Hrsg.), *Proceedings of the International Symposium on Limits and Areas in Dialectology*, 345-363. Lisboa: Centro de Linguistica da Universidade de Lisboa.
- Grimm, Jacob, and Wilhelm Grimm. 1878. *Deutsches Wörterbuch* 4. Aufl., Verlag von S. Hirzel.
- Grünert, Matthias, Piconi Mathias, Cathomas Regula, and Gadmer Thomas. 2008. *Das Funktionieren der Dreisprachigkeit im Kanton Graubünden*. Tübingen/Basel: Francke.
- Hammer, Alfred E. 1971. *German Grammar and Usage*. London: Edward Arnold.
- Hartmann, Dietrich. 1982. Deixis and Anaphora in German Dialects. The Semantics and Pragmatics of Two Definite Articles in Dialectal Varieties, In Jürgen Weissenborn and Wolfgang Klein (eds.), *Here and There Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration*, 187-207. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Haspelmath, Martin. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Clarendon Press.
- 金水敏. 2006. 『日本語存在表現の歴史』 東京: ひつじ書房.
- 熊坂亮. 2010. 「スイスのドイツ語: 方言と標準変種の接点」『北海道大学独語独文学研究年報』 36: 22-40.
- 熊坂亮. 2011 『スイスドイツ語—言語構造と社会的地位』 北海道: 北海道大学出版会.
- Löffler, Heinrich. 2003. *Dialektologie eine Einführung*. Gunter Narr Verlag: Tübingen.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Milsark, Gary L. 1977. Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English. *Linguistic Analysis* (3)1: 1-29.
- 西脇麻衣子. 2012. 「存在文と（不）定性表現—es gibt 構文の文法化を手がかりに—」『エネルゲイア』 37: 33-47.
- 東郷雄二. 2009. 「フランス語存在文と探索領域—意味解釈の文脈依存性と談話モデル」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』 文部科学省科学研究費報告書.
- 東郷雄二. 2012. 「存在文と不定名詞句の意味解釈」『フランス語学の最前線 1【特集】名詞句意味論』 53-77. 東京: ひつじ書房.
- Troxler, Ruth, and Gsteiger Thomas. 2012. *Schwyzerdütsch für Anfänger*. Lenzburg: Faro im Fona Verlag.
- 津田洋子. 2012. 「現象描写文としての IL Y A 名詞句+関係節」『フランス語学研究』 46: 19-34.
- Ward, Gregory, and Birner Betty. 1995. Definiteness and the English Existential. *Language* (71)4: 722-742.
- Weinrich, Harald. 1993. *Textgrammatik der Deutschen Sprache*. Mannheim: Bibliographisches Institut.

辞書・コーパスなど

- Ammon, Ulrich and Rhea Kyvelos (eds.) 2004. *Variantenwörterbuch des Deutschen: Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Lichtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Bickel, Hans, and Landolt Christoph. 2012. *Schweizerhochdeutsch Wörterbuch der Standardsprache in der deutschen Schweiz*. Mannheim/Zürich: Dudenverlag.
- Corpus Search, Management and Analysis System II.
- Pfeifer, Wolfgang. 1997. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Schweizer Text Korpus.

Dimensions of *es hat* and *es gibt* impersonal existentials in Swiss High German

Yuta Daigi

This research aims to clarify the semantic and pragmatic uses of impersonal existentials in Swiss High German, especially *es hat* and *es gibt* + [accusative nominal] (Eng. *it has* or *it gives* + [acc.]) existentials. In Section 2, the significance of the research on the impersonal existentials in Swiss High German is discussed. In Section 3, the various examples of the impersonal existentials from the corpora (COSMAS II, CHTK, etc.) are examined in terms of adverbials and accusative nominals. In Section 4, the distinction of the uses between *es hat* and *es gibt* existentials is considered through the questionnaire carried out in Zurich, Switzerland. Section 5 discusses the results of the examination of examples from the corpora and considers the different pragmatic use of *es hat* and *es gibt* existentials. As Daigi (2013) shows, based on Togo (2012), Kinsui (2006) and Dik (1980), the two major types of existentials in High German were recognized; “spatiotemporal existentials” and “new information-introductory existentials.” In the discourse, the function of the former (i.e. spatiotemporal existentials) is to share a certain existential presupposition between the speaker and hearer (reference), and then to explain its existential manner (predication). In contrast, the function of the latter (i.e. new information-introductory existentials) is to introduce new information to the discourse. This type of existential does not have a function of reference to indicate a certain entity that both the speaker and the hearer recognize, and therefore does not have a function of predication to describe such an entity. In this paper, I attempt to put forward a new classification of *es hat* and *es gibt* impersonal existentials in Swiss High German.